普曜経の研究（上）

——Lalitavistara における新古の層の区分——

岡　野　　潔

東北印度学宗教学会　論集　第 14 号別刷

昭和六十二年

普曜経の研究（上）

——Lalitavistara における新古の層の区分——

岡　野　　潔

仏陀の理想というのは，1人の天才の産物ではなく，1つの民族がつくりあげたものである。

ゴータマは仏陀になった。と同時に，1つの民族が仏陀をつくりあげたのである。仏伝経典の中に，我々は仏陀の理想をつくりあげてゆく1つの民族の力をまざまざと感じることができる。

この意味で，仏伝は自ら成長してゆかざるを得ないものであった。ここでとりあげる Lalitavistara という仏伝経典は正確な史実としての仏伝ではない。それはきわめて古くから徐々に生成し，3世紀以前に原形が成立し，その後次第に増広され書き変えられていった。原形成立後の過程は梵本・漢訳等の相違によって確かめられる。

私がこの稿で試みるのは原形そのものを明らかにすることである。それはこの仏伝経典を跡づけるための最も基礎的な文献学的作業となる。論文の前半となるこの稿では Lalitavistara pp. 1-260 を扱う。残りは後半で扱うつもりである。

註　Lalitavistara の内容はベック『仏教（上）』（岩波文庫）において詳しく紹介されている。仏陀の成道物語をのべたこのサンスクリット経典は，ネパールの「九法」の1つに数えられ，仏伝としては最も権威のあるものとされる。

1. 資　料

梵本，漢訳2本，蔵訳が存在する。

1. 梵本 Lalitavistara : Lefmann 本[1] を用いる。略号 LV。

2. 普曜経（大正 No. 186）: 308 年竺法護により訳出。略号普曜。

3. 方広大荘厳経（大正 No. 187）: 683 年地婆訶羅により訳出。略号方広。

4. 蔵訳 Lalitavistara(東北 No. 95) : 9 世紀の初 4 半期の訳出で，現存する梵本ときわめてよく一致する。わずかな違いは写本の伝承自体に帰せらるべき性格のもので，ここではあまり問題にならない。

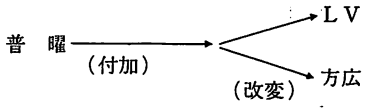
註 （1） S. Lefmann : Lalitavistara, Leben und Lehre des Śākya-buddha. Halle 1902

2. 目　的

論文の目的は LV の原形部分と付加部分とを明確に区別することであり，そのために普曜と LV との対応がまず明らかにされねばならない。普曜にある部分は原形と見なされ，ない部分は付加増広と見なされる。次に LV と方広の付加部分の相違に注意が払われる。普曜をいわば軸としてその上で LV，方広の増広の比較がなされ，それによって互いの位置・系統を決定する。

［補足的説明］

LV には付加が多いが，方広には改変が見られる。LV と方広とはどちらが古いかは決められない。一直線上に単純に並べられるような関係ではない。ただ LV の方がより古い伝承を，すなわち普曜の形を，忠実に伝えている場合が多いとは言えよう。これは方広において大規模な改変が見られることと関係している。



3. 比較の方法

まず普曜は LV ならびに方広の原形であると考えられる。普曜は一見して LV や方広と全く異なるかに見えるが，普曜の翻訳にかかわる特殊な条件として，

1. paraphrase による自由な訳であること

2. 韻文が散文に訳されてしまうことがはなはだ多いこと

3. 他の漢訳経典（太子瑞応本起経）の借用による翻訳の埋め合わせがあること

等を考慮するならば，普曜の背後にあった原文は意外に LV に近いものとなる。そこで LV との比較は普曜の訳文に対してなされる以上に背後の原文となされるのでなくてはならない。そして文レベルよりも段落レベルの比較が重視されるべきである。

［補足的説明］

普曜を LV と比較すると，文レベルではよく合わないが，段落レベルでは実によく合う。このことは注意すべきである。もし原文が全く違っているのなら，必ずそのしわよせが段落にまで来るはずだからである。普曜は，きわめて自由な訳であるが，段落レベルで見るときわめて忠実な訳である。ここから，梵本との対応を行うには，段落レベルで扱うのが望ましいという方法が得られる。

普曜のいたるところにある誤訳・想像訳については，その事情を推測することができない。J. Brough によれば原文は Gāndhārī 語で書かれていた可能性があるというが，それが翻訳を困難にしたのだろうか。

4. 手　順

結果は次のような形式でまとめられる：

1. まず普曜と LV のそれぞれの品（parivarta）の名をあげる。

2. 次に普曜から推定される LV の原形の姿を，Lefmann 本テキストの頁数・行数であらわした。

3. 次に『対応』として，普曜とLVとが対応し合い一致する箇所（＝原形）を両テキストの頁数・行数で照合した。その下に，（ただし散文…＝韻文…）と書いてあるのは，普曜が散文であるのに対してLVでは韻文である箇所を示す。

4. 『LV付加』これは先にあげた「原形」の部分に対して，現LVの成立において後から付加されたと推定される部分を，Lefmann本のテキストで示した。

『方広付加』同じく原形の部分に対して，方広の成立において後から付加されたと推定される部分を，大正蔵の頁・段・行数で示した。

『方広改変』/『LV改変』 原形に対する付加としてではなく，原形の新たな書きかえとして認められる箇所を区別した。

以上で原形と付加部分の区別はなされたことになるが，

5. 『備考』ではさらに上で取り上げなかった諸本の相違点について指摘した。

6. 最後に，それぞれの付加部分に対し「註」が付けられ，付加の内容が示される。その付加がどのような意図でなされたのかを明らかにするためである。

論降神品第一 Nidānaparivarta(1)

原形は1.4-3.9, 4.11-6.21であったと推定される。

【対応】 483a19-20＝1.4-1.6；483a20-b13＝2.4-3.9；483b13-c21＝4.11-6.14；(？)483c22-484a2＝6.14-6.21

【LV付加】 3.10-4.10[a]；6.22-7.16[b]

【方広付加】 539b2-19（＝LV3.10-4.10）

【備考】 LV 1.6-2.2に見られる34人の比丘の名が普曜には（訳されてい）ない。

註 (a) 付加部分の内容：釈尊はBuddhālaṅkāravyūhaという三昧に入り，Pūrva-buddhānusmṛtyasaṅgājñālokālaṃkāraという光明を発する。

(b) 付加部分の内容：重頌。章末で内容が偈で繰り返される。方広にこの重頌はない。

論降神品第一 Samutsāhaparivarta(2)

原形は7.20-10.2,（？10.3-10.18), 10.19-13.5であったと推定される。

【対応】 484a3-b27＝7.20-10:2；484b27-485a24＝10.19-13.5

【LV付加】 10.2-18[a]

【方広付加】 540c6-21（＝LV10.2-10.18)；541a3-8

註 (a) 付加部分の内容：7.21から続く菩薩の表現がさらに増広。

論降神品第一 Kulapariśuddhiparivarta(3)

原形は13.9-18, 20.10-21.20, 22.21-25.4, 26.1-29.12であったと推定される。

【対応】 485a25-b1＝13.9-18；485b1-c5＝20.10-21.20；485c5-486a7＝22.21-24.20；(？)486a9-16＝26.1-13；486a16-c9＝26.14-29.12

【LV付加】 13.19-20.10[a]；21.21-22.20[b]；25.5-22[c]

【方広付加】 541b27-c28（＝LV13.19-14.2, 18.8-20.10)；542a24-c8（＝21.21-22.20), 542c24-543a13（＝25.5-22)

註 (a) 付加部分の内容：降生の12年前に浄居天が婆羅門たちに三十二相を教える。転輪聖王とはいかなるものか。また12年前に閻浮提の辟支仏たちは降生を知らされ悉く涅槃に入る。（節が改まり）菩薩はトゥシタ天から生まれるべき時・大陸・国・種族を考察する。

(b) 付加部分の内容：どこに生まれるかの候補としてMathurāのKaṃsa王族，Hastināpuraの Pāṇḍana 王族（特に五王子についての言及がある)，MithilāのSumitra王が付け加わる。

(c) 付加部分の内容：菩薩の母たる女の32の性質。

説法門品第二　Dharmālokamukhaparivarta(4)

原形は 29.13-38.11 であったと推定される。

【対応】 486c11-487c24＝29.13-36.13；487c25-488b6＝36.16-38.11

【LV 付加】 36.14-15[a]

【方広付加】 545b5-6（＝LV36.14-15）

【備考】 百八法門について LV と普曜はほとんど一致するが，33.8 dhātu-samatā から 33.10 anutpādakṣānti までの 3 つの法門が普曜になく，一方普曜 487c6 には四等法門という LV に見られぬ法門がある。

註 (a) この偈が普曜にはない。

所現象品第三　Pracalaparivarta(5)

原形は 38.13-15，39.7-44.8 であったと推定される。

【対応】 488b8-9＝38.13-15；488b9-20＝39.7-19；488b26-489a11＝39.20-44.8（ただし散文 488c14-489a11＝韻文 41.14-44.8）

【LV 付加】 38.15-39.7[a]

【備考】 普曜 488b20-26 の三獣渡河の譬えは普曜独自の付加部分である。

註 (a) 付加部分の内容：菩薩はトゥシタ天に居残るマイトレーヤに自らの王冠を与える。普曜及び方広ではマイトレーヤは全く言及されない。我々はここにマイトレーヤ信仰を見ることができる。

降神処胎品第四　Pracalaparivarta(5)

原形は 44.9-51.18，（？51.19-52.9），52.9-54.16 であったと推定される。

【対応】 489a17-490c5＝44.9-51.18（ただし散文 490b13-22＝韻文 50.5-14）；490c5-491a24＝52.9-54.16

【LV 付加】 ？51.19-52.9[a]

【方広付加】 ？548a12-19（＝LV51.19-52.9）

【備考】 方広には（547c22 以下）LV50.7-10 の 2 偈がないが，普曜にはある（490b16-18）。ただし普曜のこの部分は一連の偈を誤って散文にしてしまっている箇所にあたる。

註 (a) 付加部分の内容：降生の時，大地は六種十八相の震動をなし，喜ばしき音が聞こえ，誰もが恐れることがなかった。[この部分はただし翻訳の悪さによって普曜の側で欠落したにすぎぬ可能性がある]

降神処胎品第四　Garbhāvakrāntiparivarta(6)

原形は 54.16-58.2，58.12-60.5，[普曜 492a3-4 にあたる失われた原文]，63.18-65.6？，[67.9-70.15 にあたるより短い形]，70.16-72.22，73.11-76.6 であったと推定される。

【対応】 491a25-c13＝54.16-58.2（ただし散文 491b3-6＝韻文 55.7-10）；491c14-492a2＝58.12-60.5（ただし散文 491c16-22＝主に韻文 58.16-59.16）；492a4-16＝63.18-65.6？；492a16-22＝67.9-70.15（ただし普曜は改変増広前の形と認められる。LV・方広では四天王・帝釈・梵天がそれぞれ朝・昼・夕に菩薩を訪れたとするが，普曜では三回に分けてはいない。）；492a22-b21＝70.16-72.22；492b21-c24＝73.11-76.6

【LV 付加】 58.3-11[a]；60.6-63.18[b]；65.7？-67.8[c]；73.1-10[d]

【方広付加】 549b7-12(＝LV58.3-11)；549c14-550a16(＝60.6-63.18)；550b11-22（＝65.7？-67.8)；551a7-14（＝73.1-10）

註 (a) 付加部分の内容：占夢婆羅門に衣食を与え，辻で大施会をなす。

(b) 付加部分の内容：不浄なる胎内になぜ菩薩が住しえたのかという天子たちの疑いの故にアーナンダが仏陀にそれを問う。仏陀は梵天に，かつて胎に住した時に用いた Ratnavyūha という宝殿を持って来るように命ずる。Śakra 等の欲界の諸天はそれを視ようとするが視えず，仏陀のもとに置かれた時初めて視えるようになる。

(c) 付加部分の内容：Ratnavyūha の内では，あらゆる快いものが幻のように出現する。さて菩薩は本願により必ず人界に生まれ成道し法輪を転じねばならない。入

胎後の菩薩の様子。諸天に守られ，菩薩は胎中にあって十方を照らす。

(d) 付加部分の内容：仏陀により Ratnavyūha がアーナンダや諸天に見せられた後，梵天がそれを持って帰る。

欲生時三十二瑞品第五　Janmaparivarta(7)

原形は 76.8-83.7, 91.14？-93.5, 94.4-95.6？, 96.3-101.8, 108.9-110.14, [普曜 495c8-496a16 にあたる失われた原文]，[103.7-106.7 にあたる短い形(三十二相を含む)]，112.3-117.14 であったと推定される。

【対応】 492c26-494a12＝76.8-83.7（ただし散文 493b11-c21＝韻文 78.4-81.20，散文 494a16-b2＝韻文 92.1-93.5(？)，散文 494b2-13＝韻文 94.4-95.6(？)）；494b18-495b10＝96.3－101.8；495b11-c6＝108.9-110.14；496a18-b15＝103.7-106.7(普曜のこの箇所は太子瑞応本起経　大 3，474a7-b5 からの借用で LV の翻訳ではない。いわば代用であるがそれによって LV103.7-106.7 の原文が棄てられたと見なす)；496b16-c7＝112.3-113.22；496c8-497a16＝114.5-117.14

【LV 付加】 83.8-91.21？[a]（or　91.14？)；93.6-94.3[b]；95.7-96.2[c]；101.9-108.8[d]；110.15-112.2[e]（普曜 495c7-496a18 にあたるが，改変して置き換える）

【方広付加】 552a26-29[f]；553a2-554c1（＝LV83.8-91.21？)；555a17-b1（＝95.7-96.2)；556b20-557c22（＝101.9-108.8)

【備考】 1.　普曜 494b13-18 は LV96.5 以下に類似するが，LV96.5 以下は普曜 494b19 以下に訳されているので，対応する文が見い出せない。

2.　普曜 495c7-496a18 の偈頌は，LV110.15 以下の対応する偈頌と全く異なっている。

3.　普曜 495b11-c6, 496b16-497a16 にあたる部分は方広にはないが LV には残る。これらは韻文である。

註　(a)　付加部分の内容：誕生後，菩薩は六方に各七歩し，言葉を発する。その時に起こった奇跡。ここで説法は突然中断され，未来世には「入胎の清浄さ」を信じない沙門たちが現われるであろうと仏陀は予言する。彼らは仏陀の神通の奇跡を信じず，この経を誹謗する。彼らはアヴィーチ地獄に落ちるであろう。一方この経を喜び信受する者たちは迫害されるが，彼らは未来世の仏によってあたかも親友の子のように受け入れられるであろう。

(b)　誕生の場面を描く偈頌の一部である。韻律が変わり，内容が重複して繰り返される。

(c)　付加部分の内容：五百の息子・一万の娘・男女各八百の奴隷・一万の馬・五千の象が同時に生まれる。その他奇跡が現われて，父王は子に Sarvārthasiddhi と名づける。

(d)　付加部分の内容：アシタ仙の全エピソードが散文のまま語られる。

(e)　付加部分の内容：途中までしかなかった，韻文から成るアシタ仙のエピソードを最後まで完成させている。

(f)　LV・普曜に比して偈が多い。

入天祠品第六　Devakulopanayanaparvarta(8)

原形は 117.16-120.20 であったと推定される。

【対応】 497a22-c5＝117.16-120.20

入天祠品第六　Ābharaṇaparivarta(9)

原形は 121.1-123.12 であったと推定される。

【対応】 497c5-498a1＝121.1-123.12

現書品第七　Lipiśālāsaṃdarśanaparivarta(10)

原形は 123.15-128.13 であったと推定される。

【対応】 498a3-499a24＝123.15-128.13

【備考】 LV の 46 字母（127.5-128.6）が普曜では a ra pa ca na アルファベットで書かれており，その箇所の普曜の原文が全く異なっていた可能性がある。

坐樹下観犁品第八　Kṛṣigrāmaparivarta(11)

原形は 128.15-129.2, 129.12-22, 130.6-132.22 であったと推定される。

【対 応】 499a26-27＝128.15-17；499b7-9＝128.18-129.2；499b9-15＝129.12-22（ただし散文 499b12-15＝韻文 129.16-22）；499b15-c29＝130.6-132.22（ただし散文 499c17-18＝韻文 132.7-10, 散文 499c27-29＝韻文 132.21-22）

【LV 付加】 129.3-11[(a)]；130.1-5[(b)]；133.1-136.8[(c)]

【方広付加】 560b14-17（＝LV129.3-11), 560b29-c5（＝130.1-5）

【備考】 1. 普曜 499a27-b6 は普曜独自の付加部分であると思われる。

2. LV 132.15-22 にあたる部分は方広には欠けるが普曜にはある。

3. 仏本行集経は LV のこの章を借用しているが，仏本行集経の用いた LV の原本は次の点で普曜に類似していたように思われる：(1) 二禅一四禅が出てこない，(2) LV129.16-22 の偈が散文である，(3) LV 130.2-5 の偈が欠けている。

註 (a) 付加部分の内容：菩薩は初禅のみにとどまらず，四禅にまで至った。
(b) 付加部分の内容：林の神(vanakhaṇḍadevatā)が五仙に偈で語りかける。
(c) 付加部分の内容：重頌。散文の内容を単に繰り返すわけではなく，全く別様に物語を語る独立性の高いものである。偈中に「4 つの禅定」が語られている（233.21）のは註（a）と共通して新しさを示す。

王為太子求妃品第九　Śilpasaṃdarśanaparivarta(12)

原形は 136.10-146.9 であったと推定される。

【対応】 500a4-501b9＝136.10-146.9（ただし散文 500a18-20＝韻文 137.14-17, 散文 500a28-b15＝韻文 138.11-139.16, 散文 500c1-3＝韻文 140.16-19, 散文 501b2-6＝韻文 146.4-7）

試芸品第十　Śilpasaṃdarśanaparivarta(12)

原形は 146.9-147.3？, 151.2-156.1, 157.3-9,［普曜 502a20-27 にあたる失われた原文］であったと推定される。

【対 応】 501b11-17＝146.9-20；501b17-502a18＝151.2-156.1（ただし散文 501b17-23＝韻文 151.2-8, 散文 501b24-26＝韻文 151.12-15, 散文 501b26-c5＝韻文 151.20-152.6, 散文 501c18-24＝韻文 153.7-18）；502a18-20＝157.3-9

【LV 付加】 146.21-150.18？[(a)]；156.1-157.2[(b)]；157.10-159.17[(c)]

【方広付加】 563a4-c20 （＝LV146.21-150.18）；564c2-17(＝156.1-157.2)；565a1-b1(＝157.10-159.17)

註 (a) 付加部分の内容：菩薩は数の単位の名目を最大・最小の極限に至るまで明らかにし，世界の微塵の量を明らかにする。
(b) 付加部分の内容：菩薩の弓技に驚く人々に対し，空中の天子が偈を語る。次いで菩薩の通達せる技芸・学芸の名目がいちいち列挙されている。
(c) 付加部分の内容：嫁いだゴーパーは少しも顔を隠そうとしないので，家人から非難される。これに対しゴーパーは「全く欠点がないのに隠す必要があろうか」と偈をもって語り，誤解を解く。父王は彼女を偈をもって讃ずる。

試芸品第十　Saṃcodanāparivarta(13)

原形は 183.13-185.16 であったと推定される。

【対応】 502a28-c14＝183.13-185.16

【LV 付加】 159.19-183.12[(a)]

【方広付加】 565b7-569b26[(b)]

註 (a) 原形 183.13-185.16 に付け足された，というよりも原形を最後尾に押しやって，新しい章が加えられたのである。
(b) 方広では原形部分が切り捨てられてしまい，わずかに 569b27-c2（＝LV183.13-15）の部分だけが残された。

四出観品第十一　Svapnaparivarta(14)

原形は 185.18-186.8, 186.21 (or187.7)-193.2, 196.11-197.20 であったと推定される。

【対応】 502c16-22＝185.18-186.8；502c22-503a28＝187.7-191.1（ただし散文 503a1-12＝主に韻文 188.6-189.7, 散文 503a17-21＝主に韻文 189.14-190.5, 散文 503a26-28＝主に韻文 190.14-22）；503a28-b4（実は太子瑞応本起経からの借用部分（大 3, 474c29-475a2, 475a3-6））＝191.2-9；503b5-21＝191.12-193.2（ただし散文 503b8-14＝主に韻文 191.20-192.12）；503b21-c4＝196.11-197.20（ただし散文 503b21-c4＝韻文 196.11-197.20）

【LV 付加】 186.9-187.6[(a)]；193.3-196.10[(b)]

【方広改変】 569c14-572a21

【備考】 方広は 569c14 以下全体的に書き変えられている。

註 (a) 付加部分の内容：父王は菩薩のために季節に応じた三つの宮殿を建て，菩薩を出奔させぬため警護を固める。（この三時殿のエピソードは実は普曜にも出てくる（496b7-15）が，この箇所は太子瑞応本起経からの借用部分であり，普曜の原文に三時殿のエピソードがあったかは疑わしい）。

(b) 原形の偈頌 196.11-197.20 にこれらの偈頌が付加された。原形の偈頌では菩薩自身が見た夢が述べられるだけであるが，付加されたこれらの偈頌ではゴーパーの見た夢とそれらの夢に対する菩薩の夢解釈が述べられている。方広においてはさらに加えて父王の見た夢が述べられ，菩薩の夢→ゴーパーの夢→父王の夢という発展が普曜→ LV →方広の順にあったことがうかがえる。

四出観品第十一　Abhiniṣkramaṇaparivarta(15)

原形は 198.1-206.2 であったと推定される。

【対応】 503c4-504c7＝198.1-206.2(ただし散文 503c10-27＝韻文 198.10-200.11, 散文 504a10-15(抄訳)＝韻文 201.11-202.8, 散文 504a21-25？＝韻文 202.17-203.7)

【方広改変】 573b3-13（順序の変化のみ）；573c2-6

出家品第十二　Abhiniṣkramaṇaparivarta(15)

原形は 206.3-213.6 であったと推定される。

【対応】 504c13＝206.3-4；504c13-25(実は太子瑞応本起経からの借用部分（大 3, 475 b6-18))＝206.4-17；504c26－506a22＝206.18-213.6（ただし韻文 505a29＝散文 208.10-12（？），散文 505c4-18＝主に韻文 210.2-21, 散文 505c21-24＝韻文 211.5-8, 散文 506a6-7＝韻文 212, 10-11（？））

【方広改変】 573c7-574a9；574b1-26（位置の変化のみ）；574b27-575b4

【備考】 ここでは普曜と LV が全く一致するのに対し，方広には全体的な改変が見られる。

告車匿被馬品第十三　Abhiniṣkramaṇaparivarta(15)

原形は 214.14-225.4, [普曜 507c17-508a1 の失われた原文], 229.21-235.20, [普曜 508c23-509a4 の失われた原文], 235.21-237.16 であったと推定される。

【対応】 506a24-507c17＝214.14-225.4（ただし散文 506a24-b16＝韻文 214.14-216.10, 散文 506b17-26＝主に韻文 216.11-217.4, 散文 506c19-21＝韻文 219.3-4, 散文 507a11-c17＝韻文 220.5-225.4）；508a1-c23＝229.21-235.20（ただし散文 508a1-c23＝韻文 229.21-235.20）；509a5-b8＝235.21-237.16（ただし散文 509a5-b8＝韻文 235.21-237.16）

【方広改変】 575b5-19；575c1-578c1

【備考】 1. 普曜 507c17-508a1 は LV になく，一方 LV225.5-229.19 は普曜にはない。しかし両者の位置は同じである。

2. 普曜 508c23-509a4 は普曜独自の付加部分と見なすことも可能である。

3. この章で方広がLVと普曜に一致するのは575b20-29（＝LV216.13-217.4）だけである。

告車匿被馬品第十三　Bimbisāropasaṃkramaṇaparivarta(16)

原形は[普曜509b8-27にあたる失われた原文][a]，240.11-243.10であったと推定される。

【対応】 509b27-510a22＝240.11-243.10（ただし散文509b27-510a22＝韻文240.11-243.10，また途中の対応には問題が残る）[b]

【LV付加】 237.18-240.10[c]

【方広付加】 578c7-579a22（＝LV237.18-240.10）

註 (a) 普曜509b8-27はLVでは切り捨てられているが，これはLV245.16-248.5の部分が普曜510c3-10の部分を切り捨てて入れ替わっていることと内的な関連がある。

(b) LVにはここに計33の偈があるが，普曜ではその第2偈から始まり最後の偈が欠けている。普曜では全部散文に訳されているので，偈の正確な対応が困難であるが，LVと比して途中にもかなりの異同があるようである。普曜で確認できる偈は[2]—[4]，—？—，[7]—[14ab]，—？—，[20]—[22]？，[25]？[24] [26] [27]，—？—，[29]—[32]であり，間にある「—？—」の箇所はLVと異なったものであった可能性がある。普曜で[24]の先に[25]の塩水の譬えが見られるのはむしろ方広に見られる偈の順序と一致する。

(c) 阿含を借用した付加が以下の諸品においてかなり見られる。この部分もそうで，Mahāsaccakasutta MN. I, p 240（あるいはAriyapariyesanasutta MN. I, pp 163-165）にあたるアーラーダ・カーラーパの段を阿含からLVは借用し，付加したと思われる。ルドラカ・ラーマプトラは普曜510b2-c3に出てくるから原形には存したのに対し，アーラーダの方は原形では欠けていたことになる。

異学三部品第十四　Duṣkaracaryāparivarta(17)

原形は248.6-12, 243.18-245.15, [普曜510c3-10にあたる失われた原文], [248.13-250.5にあたるより短い形]，250.5-8であったと推定される。

【対応】 510a28-b1＝248.6-12（＝方広580c14-21）；510b2-c3＝243.18-245.15；510c10-27＝248.13-250.5（ただし普曜は改変増広前の形と認められる）；510c27-511a1＝250.5-8

【LV付加】 245.16-248.5[a]

【方広付加】 580b15-c13（＝LV245.16-248.5）

【LV改変】 248.13-250.5[b]

【方広改変】 580c22-581a26（＝LV248.13-250.5）

【備考】 普曜510b23-26はLVと比して多少異なっている。ここではLVの方が古い単純な形を残している。

註 (a) この付加部分は普曜510c3-10にあたる部分を切り捨てて，代わりに挿入されたものである。普曜のその部分は菩薩がウルヴィルヴァ村のカーシャパ三兄弟に会ったことをのべる。これは阿含の伝承と一致しないために，LVにおいて切り捨てられたものと思われる。一方代わりに付け加えられたLVの対応部分においては，普曜ではすでに509b18でのべたことになっている（この部分はLVでは切り捨てられた）5人の修行者が初めて登場する。普曜において彼らはシュッドーダナ王の命を受けたシャカ族の子らであるが，LVにおいてはルドラカ・ラーマプトラの弟子たちであり，師を捨てて菩薩に従う。この付加部分では続いてMahāsaccakasutta MN.I, pp 240-242にあたる「前代未聞の3つの比喩」の段が阿含から借用されており，阿含の権威との一体化を目的とする後世の手を知ることができる。

(b) この改変においては，外道たちの有様の描写が簡単なものからきわめて詳細なものへと変わっている。

六年勤苦行品第十五　Duṣkaracaryāparivarta(17)

原形は250.9-251.5, 256.13-258.2, 258.17-18, 258.21-259.14, 259.17-20, 260.1-14であったと推定される。

【対応】 511a3-18＝250.9－251.5；511a18-b12＝256.13-258.2[a]；511b13-14＝258.17-18；511b15-c1＝258.21-259.14；511c2-5＝259.17-20；511c6-17＝260.1-14

【LV付加】 251.6-256.12[b]；258.3-16（7偈）[c]；258.19-20（1偈）；259.15-16（1偈）；259.21-22（1偈）

【方広付加】 581b2-c4(＝LV251.6-256.12)；581c20-582a12(＝258.3-16)；582a15-17 (＝258.19-20)；582b1-3(＝259.21-22)

註 (a) 以下の部分は普曜には見られない偈がLVにあり，それが両者の対応を複雑にしている。わかりやすくするため，偈の番号で示すなら，普曜に存在する偈は[1]-[3]，[11]，[13]-[20]，[22]-[23]，[25]-[31]であり，特に[28]は[27]と合体して一偈を形成する(511c10-11)。

(b) この付加は3つの部分に細分できる。初めの部分はMahāsaccakasutta MN. I, pp 243-244にあたる止息禅の苦行を行なう段を阿含から借用し，付加したものである。次に第2の部分は，LV独自の付加として(方広にも出てこない)，三十三天から生母マーヤーが苦行で死んだようになっている菩薩を訪ね来るエピソードがのべられる。第3の付加部分は再びMahāsaccakasuttaの苦行の描写を続ける。菩薩は1つのなつめから1つの米粒と食事を減らし，ついに断食にいたる。(なつめはMahāsaccakasuttaに出てこない。同様の菩薩の苦行の描写がMahāsīhanādasutta MN. I, pp 80-81にもあるが，こちらではなつめで断食行を始めているから，あるいはLVはそちらをも利用したのかも知れない。しかしまたLVの利用したMahāsaccakasuttaがそのような形であったことも十分考えられる)。付加の第1の部分と第3の部分はもともとくっついており，そこに第2の部分をなすマーヤーのエピソードが挿入されたものと思われる。

(c) 重頌部分にも付加がなされている。これは散文部分の増広(248.13-250.5)に対応して重頌が増やされたのである。このことはLVの散文と韻文の成立上の関係を考える時，貴重な示唆となる。

以上で梵本の260ページまでの原形が明らかになった。ここで推定された原形とは，竺法護が手にしていた普曜経の原本にほかならない。この原形に，【LV付加/改変】として示された部分を加えると，LVができる。同じく【方広付加/改変】として示された部分を加えると，方広の原本になる。